

名戸ヶ谷ビオトープだより

第45号

2011年春号

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

<http://nadogaya-biotope.org/index.html>

発行責任者： 篠崎 将

Tel/Fax: 04-7173-6353

第9回総会終了 部会制を廃止、役員改選が行われました 生きもの多様性プランの説明も

第9回総会が1月22日(土) 10時より開催されました。総会には20名の方々が出席され、柏市環境保全課からも2名ご出席いただきました。小笠原議長のもとで議事の進行が進められ、担当幹事より稲作、生きもの、植物、広報、育てる会全般についてそれぞれ活動報告と今年の計画について説明が行われました。また、会計決算と予算案が示され、全ての案件について拍手でもって承認されました。

出席者からの意見として、「ボーイスカウトなどがビオトープに来る際にはビオトープの一般の会員も参加できるように配慮して欲しい」「ビオトープの動植物のアルバムを会員に配る(或いは電子媒体を利用する)ことを検討して欲しい」との意見が出されました。



始めて名戸ヶ谷ふるさとセンターで開催 報告する篠崎会長



総会終了後 和やかに懇親会

今回の総会では組織の若干の変更と役員改選が行われました。従来は稲作部会やホテル・生き物部会といった部会制が採られていましたが、この部会制を廃止することになりました。ビオトープのメンバーは一つの部会に留まらずビオトープの全ての活動に積極的に関わってきていますので、部会制の枠を取り払ってゆこう、と言うのが趣旨です。また、今年は役員改選の時期にあたるため、一部の役員交代が行われることになりました。(詳細は別途配布の総会議案書を参照してください)

総会終了後は、柏市環境保全課から「柏市生きもの多様性プラン」について講演が行われました。講演終了後、懇親昼食会が催され、今年の活動を期して楽しいひと時を過ごしました。

(文・写真 佐々木光正)

新役員紹介

山村和子

長らく担当いただきました影山さんに替わって今年から会計をさせていただきます山村和子です。どうぞよろしく御願いをいたします。お役をいただいて今更ながらピオトープを育てる会について知らなかった事が多いのに驚いております。あまり深く考えもせずにお役をお引き受けしてしまった事を多少後悔致しておりますが楽天的な性格と皆様のご協力で乗り切って参りたいと思います。しばらくは皆様にご迷惑をお掛けすることになると思いますがご容赦くださいませ。

ピオトープは大好きな植物や生き物にいつでも会える。季節を感じながら体を動かして仕事ができる。その上、手作りで安心なお米が優先的にいただける。



ピオトープは私にとってそんな楽しく、うれしい場所です。

ピオトープとピオトープを育てる会に少しでもお役に立つことが出来たらしあわせに思います。

新役員紹介

久米正宏

会社勤めを終えて間もなく、町会の活動でもご一緒だった近所の才川さんに誘われ、仕事柄手慣れたスコップと一輪車で土を移動し、田圃の畔の補強を手伝いました。

そんな冬を過ごし、平成21年春に正式に入会いたしました。ピオトープの何たるかも知らず、生来好きな体を動かす実作業をしながら、「不耕起農法」だ「自然農法」だと話を聞いているうちに、忘れかけた自然に対する愛着がふつふつと戻って来たというのが実状です。

半世紀以上も前になる幼少期は、日立の海岸段丘の崖の上の松林に囲まれた社宅で生まれ育ちました。既に周囲には広々とした工場群が出来ていましたが、太平洋と阿武隈の山に挟まれた自然豊かな地で、小魚捕り、田圃のドジョウ捕り、植物採集、はたまた、まだ許された時代だったのでしょか、年上の番長とおとりの鳥とトリモチを持って、野鳥捕りに朝早く出かけたりしたものでした。

柏に移り住んで30年、そんな私にとって、野生生物が棲む「名戸ヶ谷ピオトープ」の空間は正にノスタルジーを感じさせる場所なのです。

今年から名戸小の連絡係を申しつかりました。孫のようにかわいい子どもたちに、自然があることのありがたさ、小さな生きものをも大切に育てる心が育まれるよう見守っていこうと思います。私自身も、ピオトープの生きもの、植物、稲作りをもっと身近に感じられるよう、居心地の良い仲間と共に、明るく元気に活動していけたらと思います。よろしく願いします。



退任役員からの挨拶

外川克之

この度、一身上の都合により1月の総会をもって幹事を退任させていただきました。

幹事として、その責を全うしたかはいささか疑問がありますが、2期4年間に賜りましたご厚情に感謝申し上げます。

自然環境の保全は、昨今益々大切になっており、多くの方々の参加が期待されています。

ピオトープを育てる会には設立当初から、稲作を中心に参加しておりますが、このような自然環境保全の実践の場の活動を通して少しでも役立てばとの思いであります。

幹事を辞任しても会員として活動を続けてゆきますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。



退任役員からの挨拶

春山秀雄

冠動脈バイパス手術が終わるのを待って始まった前立腺ガンの治療。

それに以前から治療中の「生活習慣病」に歯科での治療も重なり、3病院、5つの科との往復に追われる毎日。朝・昼・晩・毎日10種類、18粒の薬を「食べ忘れない」ことに神経を集中させるのも初めての経験。

お世話になりました。広報の仕事を高田さんに一任して、幹事の仕事から引退します。一会員としてはピオトープに残りますので、リハビリの足をピオトープまで延ばしてみなさんの明るい笑顔にお目にかかれることを楽しみにしております。もうすぐ春ですね。

2010年度の稲作について

概況

我がピオトープの稲作も今年で8年目になり、軌道にのりつつあります。会員各位の農作業もだいぶ慣れてきたようです。しかし膝まで浸かる深田に入っの田植え、田の草取り、稲刈り作業やハザ掛け、足踏み脱穀作業等は肉体的にかなり過酷な作業であり、今年も大変ご苦労様されました。

ところが今年の米の収穫量はもち米が玄米ベースで106kg前年比80%弱であり、又うるち米も300kgの前年比94%でした。7、8月の記録的猛暑が続いた影響もあり、収穫量は残念ながら減少しました。又米質も未成熟粒や胴割れ粒が多く見られ、米質の面でも今一步でした。

刈り取った稲束の量での査定では確かに前年を上回っていました。その時稲束を持った状態で穂がやや軽いように感じましたが、収穫量がこれほど減少するとは予想しませんでした。

これは7、8月に続いた熱帯夜の影響で籾中での米粒の結実状況が予想以上に悪かったためと思います。更にこの続いた暑さの影響で米粒が胴割し、小米の混入が多くなりました。

年間を通じた詳細状況

年間を通じての今年の稲作作況は以下の通りでした。

(1) 今年の稲苗はこれまでの不耕起栽培苗に代えて柏市内・藤心ライスセンターの通常苗を使用しましたが、その差異は明確には認められませんでした。

通常苗でも問題がないことが確認されたので、来年も柏市内の通常苗の使用が可能である。

但し、今年のうるち苗は手植え用としては草丈がやや短すぎた。対策としては田植え時の水田を浅水にすることと、水田の地均しを確実にして深い所が無いようにすることである。

尚、引き取った苗の丈を伸ばしたい場合は床ごと水田に入ると、根が伸びて扱い難くなるので、ポリシートの上に置き、乾かないように水かけをするのが良いとの情報を得ました。

(2) 今年の肥培計画は元肥を多くして、十分な分けつと、しっかりした稲茎作りに重点をおきました。そのため元肥を増やし、穂肥はやや控えめにした。

反当たりの施肥中の窒素成分量(g)は以下の通りでした。

| | 2010年 | 2009年 |
|------|-------|-----------------------|
| コメヌカ | 1,120 | 記録なし (2010年よりは少ない) |
| 元肥 | 4,500 | 3,996 |
| 穂肥 | 1,789 | 2,434 |

<参考> ・米ヌカの窒素分:2%、・熟成有機肥料の窒素分:7,2%

分けつ、稲茎の生育までは順調でしたが、穂肥不足のためか籾中の結実が十分ではなく、又猛暑の影響も受けて減収になりました。

来年は秋の米ヌカ散布を増やし、元肥を減らし、穂肥を増やす肥培計画を立案したい。

(3) 6月中旬にうるち水田の水面がアオミドロで覆われました。特に5、6、7番水田及び2番水田の下流域のように水が停滞しがちな地点が顕著であった。一部人手で排除したが、6月下旬になると自然消失しました。分けつの時期でもあり、分けつ阻害を心配しましたが、その後目立った影響は認められなかった。

アオミドロの異常繁茂の明確な原因は分かりませんが、元肥の有機肥料の有機物の分解物により水が富栄養状態になり、その状態で水温が上昇したため、アオミドロが一斉繁茂したことが考えられる。

尚、アオミドロの繁茂は水温を下げ、土壌への太陽光や空気の進入を妨げ、稲の生育に影響することが考えられる。対策として元肥の散布時期を田植え2~3週間前(4月中旬)に早めて、元肥の急激な有機物分解をコントロールしたい。

(4) 雑草対策については、コナギの繁殖の兆しが見えましたが会員各位による早めの除草作業により、大事に至らなかった。しかしうるち水田では刈株の中に生えたアメリカセンダングサが稲丈の上まで伸び、稲作の生育を一部阻害した。この対策としては田植え前にもち水田で行っているように刈株を足で踏み込む作業が有効であろう。

又うるち3、4、5番水田では雑草「オモダカ」と「ヒエ」が目立っていた。特にヒエはイネ科植物でもあり、丈が稲以上になり、稲の生育を阻害するので、手作業で丹念に抜き取ることが必要である。

(5) 水管理については稲の倒伏を心配して、落水時期を稲刈り前約3週間に早めた。稲の倒伏は確かに軽減されて、稲刈り作業も大いに改善された。反面この早めの落水は稲の高温障害の被害を受けやすくなったようである。

今年もち水田の冷たい湧き水の影響を軽減するため、もち1番水田への供給水路の途中に小さな池を掘り、そこに水を一旦溜めて水温を上げるようにしました。1番水田の給水口付近に若干生育遅れ部分が見られましたが、これまでのような冷たい水の影響は大幅に改善されました。来年は池を更に大きくして水の滞留時間を長めて、水田に入る前に水を温めて、冷水の影響を減らしたい。

(6) うるち水田はこれまで刈株の間に苗を植える方式を続けてきましたが、結果として水田の地均しが殆ど行われずに低い地点と高い地点とができており、深い地点に植えた苗は浮き苗になり、根付けが遅れ、それが分けつ不足の原因にもなっていた。来年は田植え前に刈株を足で踏み込む作業を行って、十分に地均しすることが必要である。

5 ページ下段へ続く

かしのホットスポットめぐり

文京区立柏学園

文京区立柏学園のある場所は、大津川河畔に広がる水田地帯に突き出た舌状台地です。この台地には、弥生式住居跡や中世の戸張城址が今も残っています。東京都文京区(当時は本郷区といわれていました)はこの台地を買い取り、戦後 文京区児童の校外施設として開園しました。現在も小学生たちが頻繁に利用し、都内に住む児童が自然と触れ合う貴重な施設として活用されています。児童が利用する施設であるため敷地はフェンスで囲われ、部外者の立ち入りは制限されています。

この柏学園は貴重な花の宝庫です。この台地は昔から人々が住んだり、林を利用したりしてきたため



文京区立柏学園：国道16号線の柏トンネルの東側の台地上



北向き斜面

るい林だったようです。台地の明るい斜面林は豊かな植物を育ててきました。柏学園となった後も、斜面林の間伐と定期的なササ刈りが行われ、植物の生育環境が維持されてきました。そのお陰で今日まで貴重な花が残されてきたと思われます。

柏学園は部外者の立ち入りが規制されているため園内に入って花を見るのは容易ではありません。しかし、園内に入らずに花を觀賞する方法があります。柏学園入り口から左に曲がる道がありますが、この道からフェンス越しに花を見る方法です。この道沿いから見る北向き斜面は柏学園の中で最も花が豊かな場所です。フェンス越しではありますが、ほとんどの貴重な花を見ることが出来ます。

ヤブレガサ



ヒトリシズカ



イカリソウ



チダケサシ



では、この北向き斜面でどんな花が見られるのか、季節を追ってご紹介します。

4月初め、純白のコブシが咲くと花の季節が始まります。ヤブレガサのユーモラスな幼葉が見られます。暫くすると、高さ10cm余りのヒトリシズカの群生が点々と現れます。4月の下旬、イカリソウの群生が出現します。恐らく柏市内でも1、2を争うほどの規模の群生で、北向き斜面の春を飾る名花です。晩春から初夏にかけては、数が少なくなりましたがキンランが咲き、ワニグチソウやフタリシズカも顔を出します。

チダケサシのピンク色の穂が林立すると、夏の到来です。この頃、キヌタソウが咲きます。目立たない草ですが、千葉県絶滅危惧種の中でも特に重要視されていて、柏市内では今ではここでもしか見られない貴重な花です。真夏を迎えると何本ものヤマユリが香りを放ちながら大きな花を開きます。この頃の北向き斜面は夏草が賑わい、キツネノカミソリ、アキカラムツ、アキノタムラソウ、センニンソウなどが咲いています。

秋の気配を感じる頃、懐かしい里山植物—ツリガネニンジンやワレモコウが花をつけます。里山からこのような秋咲き植物が消えつつあるなかで、ツリガネニンジンやワレモコウは護りたい植物の一つです。10月の声をきくと、妖艶な紫色のツクバトリカブトが咲きます。秋も深まると、トネアザミ、ノハラアザミが斜面を飾り、野菊のノコンギク、シロヨメナが斜面下を彩ります。
(文・写真 佐々木光正)

キヌタソウ



ツリガネニンジン



ワレモコウ



ツクバトリカブト



(7) 関連調査事項

今年には次の項目について測定しましたので、その結果を以下付記する。

| | うるち穂 | もち穂 |
|---------|------|------|
| 穂長 (cm) | 20.0 | 14.2 |
| 籾数 (個) | 140 | 99 |

①うるち稲ともち稲の穂の長さと着生籾数

稲刈り時にうるち穂ともち穂の長さに着生籾数を測定してみた。(10本の平均数)

もち穂はうるち穂に比べて穂長が短く、籾数も少ない傾向が見られた。

これは品種の特性であり、栽培の良否とは直接関係ないと思います。

②収穫米(うるち)の千粒重の計測

千粒重とは一般に穀物類等での千粒の重量をグラム

値で表したものであり、粒の大きさを示す数値である。具体的には品種の特質とか穀粒の未熟度の評価等に使用されている。

今年ビオトープで収穫した米は外観上に粒が小さいように感じたので市販の精白米を対照にして精白うるち米の千粒重を測定してみた。

| | 千粒重 |
|--------|-----------------|
| ビオトープ米 | 13.0g(玄米で14.4g) |
| 市販米 | 18.4g(玄米で20.4g) |

*測定は白米で行い、精白率90%として玄米の千粒重を算出した。

参考：食用玄米：20～22g

酒米玄米：26～28g(山田錦)

今年のビオトープの収穫米は未成熟粒や胴割粒が混入されており、米粒は総体的に小粒であったと言える。

(影山賢三)

ニホンアカガエルの卵塊調査観察会



各自 卵塊を目視で観察し、全体で集計した

二十四節気の雨水も過ぎて、日差しも少しずつ強くなり春の訪れを感じるこの頃です。

2月27日(日) 朝から晴れ上がり予定のアカガエルの卵塊調査観察会を行いました。

幹事5名の参加でビオトープ内を歩き回り、水の中に沈んだ卵塊を見つけていきました。

総数は19個で、内訳はAゾーン13個、Bゾーン6個でした。昨年来整備してきた

カエル産卵池にも2個あって喜びです。産卵状況は、昨年比大幅に少なくいろいろ

異常気象の影響下か、どうか不明ですが心配材料です。これから3月に入

り次第に水温も上がって更に卵塊数の増えることを期待したいと思います。

昨年の同時期、2月20日ではA、Bゾーンで63個を見つけ、それから3月1日まで観察を続けて最終的に85個となりました。卵塊には、1,000個前後の卵が寒天質に包まれているとの事で、無事にオタマジャクシからアカガエルへと育てて欲しいものです。

今回は少ない卵塊数であり、一週間後の3月5日(土)にも同様の観察会を実施する計画です。

(生きもの担当 藤平三郎)



いずれも田んぼの中の卵塊、右下はBゾーンの池。この中にも卵塊が見られた。



ビオトープとわたし 佐々木 光正

「名戸ヶ谷遊水地」のこと

かつて、名戸ヶ谷ビオトープから新柏駅にかけての一带は、「名戸ヶ谷遊水地」と呼ばれるほどの湿地でした。

私は1974年に北柏から現住所に引っ越しました。趣味の花の写真撮影のために週末には自転車で行き出掛けていましたが、その中の一つに名戸ヶ谷遊水地がありました。時には子供連れで行き出掛けましたが、名戸ヶ谷遊水地には蛇が多く、子供達は嫌がっていたのを覚えています。名戸ヶ谷遊水地は特異な姿をした湿地でした。湿地には川らしいものはなく、水はヨシが生える湿地全体に浅く広がってゆっくと大津川に向かって流れていました。今から思えば尾瀬ヶ原のような湿原空間でした。



後から知ったことですが、1977年に柏市から調査を委嘱された東大西村調査団は、この湿地を「名戸ヶ谷遊水地」と呼び、「柏市街地の中に素晴らしい水辺の空間が存在している」と報告しています。更に、調査の結果、水が湿地全体に広く行き渡って流れる過程で水質がかなり浄化されていることが分かりました。調査団は名戸ヶ谷遊水地の水浄化機能を高く評価し、この湿地空間と植生を残す必要性を訴えています。

残念なことに、この訴えは実現せず、湿地は埋め立てられて今の新柏市街地に変わってしまいました。その新柏で、埋め立てを嘆く老人と出会いました。心打たれた私は老人の話その日の日記(1987年8月)に記しています。「12年前にこの地に引っ越してきた。或る晩ホテルを手にした人に教えられ、この湿地に下りてきたらホテルが乱舞していた。妻を連れ出そうと家に戻ったが、目が少し不自由な妻はためらった。でも、湿地に下りてくると飛び交うホテルを簡単に手で捕まえることが出来、それを妻は喜んでくれた。その妻はもう死んだ。そして湿地も埋め立てられた。寂しい限りだ。」

名戸ヶ谷ビオトープは「名戸ヶ谷遊水地」の面影を残す唯一のスポットです。

木道補修工事

市道からBゾーン北側木道に入る部分のベンチとトイレの間が、土のまま、雨が降るとぬかるみになり、冬は霜柱でべとべとになりますので踏み板を敷きました。散歩する方が足元を気にしないですみます。Aゾーンの北側木道はこの秋に改修予定ですが、痛みがひどいので昨年踏み板を重ね敷きました。2枚幅でしたが、狭く歩きにくいので、3枚幅に張り増しました。皆さんも気をつけて歩いてください。ザリガニ釣り場も安全に楽しく釣ってもらえるよう入り口側もシーズン前に張り直します。

(小笠原 智)



ビオトープの花

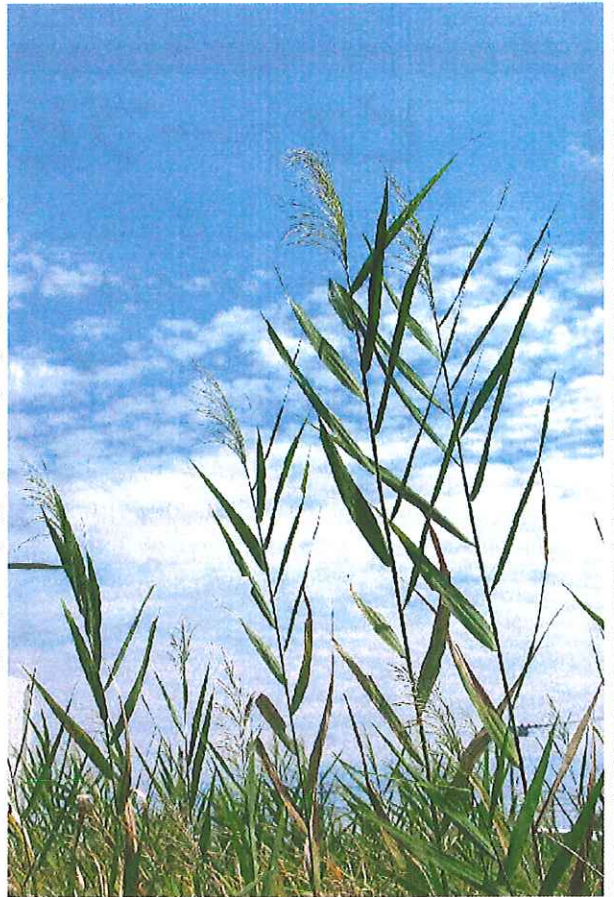
ヨシ

ビオトープで最も背が高い草といえば、それはヨシです。ヨシは湿地に生える大型植物で、手賀沼にも大きな群生を作っています。ビオトープに限らず、方々の水田や湿地を人手を加えずに何年も放置したままにしておくと、ヨシやガマなどの大型植物が生えてきて、最後にはヨシなどの大型植物が席卷してしまいます。それが湿った場所の究極の姿です。

ところで、ヨシと言う名前は昔にはアシと呼ばれていました。アシと呼ばれた由縁は、一説には「青し」から転じたものといわれています。だが、アシは「悪し」に通ずるとして忌み嫌われたため、いつの間にかヨシと呼ばれるようになったそうです。

ビオトープのヨシは北側では邪魔者扱いされて切り取られています。南側に群生しているヨシはオオヨシキリなどの鳥の棲家となり、魚や昆虫を支える役目も担っています。

(文・写真：佐々木光正)



ビオトープにも めだかを！！

ビオトープAゾーンのホタルエリアに「めだか池」を作りました。周囲を木道根太材の廃材で囲み、目立たないようにしています。水の出入りに金網ネットをつけてカダヤシが入らないようにし、上に鳥避けネットを掛ける予定です。めだかは、中原小学校のビオトープ池から分けてもらう予定です。皆さんも見守ってくださいね。

(小笠原智)



編集後記

前号にも書きましたが、ビオトープだよりを編集していて、大変、ありがたいのは、会の皆さんのご協力です。

この時期は、自然界はいわば冬眠状態で、あまり大きな変化はないので、自然を相手の作業は多くはお休みになります。

したがって、記事もあまりなくなるわけですが、今号も多くの材料が手許に集まり、いくつかは割愛せざるを得ませんでした。

なかでも、佐々木さんには多くの記事、写真を寄せて頂き感謝です。たまたま、「ビオトープとわたし」も佐々木さんにあたってしまいました。

私事ですが、この間、入院・手術という健康上の問題があり、不十分だったところも多々ありますが、皆さんにカバーして頂きました。

厚くお礼申し上げます。

(高田昭治)